



オアシス

文責：学長
桑原雅次

出雲芸術アカデミーだより 2024年2月7日発行 特別号

特集：米山名誉学長を偲んで！

令和5年12月26日、“米山道雄”名誉学長がご逝去されました。突然の訃報連絡に驚きを隠せませんでした。米山氏は、本アカデミーの立ち上げ時に初代学長として就任され、これまでに様々な困難を乗り越え、今日のような姿に発展を遂げていただいた最大の功労者といっても過言ではありません。

現役時代の米山氏は、長年島根県立高等学校を中心に音楽指導者として活躍をされました。主に合唱教育に熱意を抱かれ、教え子の中に日本を代表する声楽家を多く輩出されるなど、音楽を通じた人間育成に手腕を発揮されました。また、市民合唱団の指導者としても活躍され、各種コンクールでの入賞を通して当初の島根県の合唱発展に大きく貢献していただきました。そして、忘れてはならないのが、「作曲家」としての米山氏です。合唱曲を中心に、県内の小中高等学校の校歌、幼稚園歌、各諸団体の社歌など多岐にわたりますが、郷土を題材とした曲は数千曲にも上るのではないかと想像をするほどです。その代表曲は何といても「高瀬川讃歌」でしょうか…。

これらのご功績は、「第1回出雲市ふるさと文化賞、出雲市民功労表彰、島根県芸術文化30周年記念功労賞、島根県教育委員会文化功労賞」などの受賞履歴からも伺えます。

一方で晩年の米山氏は、「幼児教育」に力を注がれ、本アカデミーでも幼児科教授として講座にも積極的に参加され、親子による創作劇発表に貢献されている姿がとても印象に残っています。幼児教育には本アカデミーに限らず市内の幼稚園からも多く声がかかり、ギターを片手に幼児たちを音楽で誘う魔法があった手法に、みんなから「ミッチー先生」と呼ばれるなど、多くの市民からも親しまれました。

米山氏は、数々のご功績を残され旅立たれましたが、本アカデミーでは今年度中に計画されている2公演、1事業の中で氏を偲び「演奏」「合唱」「鑑賞」をそれぞれ行います。

① 「ニューイヤーコンサート 2024」

日時：令和6年2月11日（日祝）14:00 開演

会場：大社文化プレイスうらら館 だんだんホール

終演後米山氏を偲ぶ曲：バッハ作曲「主よ、人の望みの喜びよ」

② 「第14回LPレコード音楽サロン」

日時：令和6年2月25日（日）14:00 開演

会場：大社文化プレイスうらら館 ごえんホール

オープニングで米山氏を偲ぶ曲：フォーレ作曲「レクイエム」から

《われを許したまえ、楽園にて》



③ 「iPhil&出雲 Jr.フィル プロムナード・コンサート」

日時：令和6年3月30日（土）14：00 開演

会場：大社文化プレイスうらら館 だんだんホール

オープニングで米山氏を偲ぶ曲：三木たかし作曲、荒木とよひさ作詞「心の瞳」



1997年に「出雲フィルハーモニー交響楽団」が発足し、2005年には「出雲芸術アカデミー」が創設されました。これまでに数々のコンサートが開催されましたが、米山氏は公演プログラムの中で挨拶文を多く残されました。その独特な語り口調は、読む者を引き付けるものがあり、当時のエピソードなどをユーモアたっぷりに紹介されるなど興味深く、今となっては歴史を探る資料としても貴重なものになりました。

すべては紹介できませんが、米山氏らしい挨拶文を掲載させていただき、氏の本アカデミーに対する愛情や歴史を感じていただければ幸いです。

◆出雲フィルハーモニー交響楽団 第10回記念定期演奏会から <平成20年(2008)>

【迎えた10周年を祝い、夜明け前をあらためて振り返る】

平成9年10月4日「出雲フィルハーモニー交響楽団」の結団式が行われた。西尾理弘市長を団長のもと、松江市出身の川上昇氏（当時作陽音大助教授）を常任指揮者に迎え、38人の団員（オーディション合格者による）が集い、まさしく期待と不安の第一歩であった。西尾団長の結団式の挨拶、「市は財政面、情報提供をバックアップする。音楽の力もある出雲でやがて出雲オペラも夢見よう」と激励。川上氏も「始まりの一步だが、10年後には子どもたちの憧れになっていると思う」。二人の思いは現実、予言通りになったのがすばらしいことだ。面白い、うれしい。翌年3月1日「ふるさと」をテーマに団員44名と助演30名も加わり、記念すべき初演のステージは興奮の渦の中で出雲フィルの1ページを記すことになった。

昭和23年に浜田で「島根音楽院」が創設された。戦後、故郷石見に帰ってきたたくさんの音楽人たちが立ち上げた貴重な出来事がある。中でも塩田卓爾氏は帝国海軍軍楽隊に入隊しヴァイオリン、トロンボーン、バリトンを会得して帰郷。……中略……

平成7年の春に私は塩田氏を訪ねた。桜江町大貫、江の川沿いから山道に入る。ローソクの蠟の原料ハゼを収穫、その工場もあるかつて豪農だった屋敷で、永い思い出話は一日で終わらない。大正2年生まれとはいえ、若さ、音楽の力は衰えていなかった。塩田翁への訪問は、ヴァイオリンの指導者と指揮者の人選。そのアドバイスを受けるのが目的だったが、スケールの大きな方に逢って胸を熱くした。

「川上昇を選びなさい。やってくれますよ」塩田先生の一言で出雲フィルの流れが始まった。

「オーケストラを作ろう」と市長。「いやあそんな」「やるんだよ 君」「でも」「そんなことやってみなけりゃだめだよ」と、何度も・責められ、口説かれて・幸せな今を思うと「西尾理弘の力」はなんだや・と愕くのだが、私自身の「スケールの狭さ」も反省。

川上昇氏の退任後、副指揮者だった中井章徳氏が就任し「学ぶオーケストラ」に変わった。「〇〇響を追い越せ」とあの人がかぶからでもある。まもなく市民が誇り、愛す「出雲フィル」も見えてくる。

「思い込みを捨て、思い付きを拾え」を信条にして元気を出そう。

出雲芸術アカデミー学長 米山道雄

◆出雲フィルハーモニー交響楽団 第13回定期演奏会から <平成22年(2010)>

【出雲フィルの願い・・・「続ける」と情熱、そして暮らしの中の一部でありたい】

……前文略……

平成9年(1997年)、芸術文化によるまちづくりを目指す出雲市の全面支援で「出雲フィルハーモニー交響楽団」が創設された。目指すのは(1)地域に親しまれるオーケストラ。(2)質の高い演奏活動を通じて音楽の振興を図り、特に後継者の育成につとめる。平成10年(1998年)3月の初演は誕生の感激であった。

ところがオーケストラの基盤となる弦楽器奏者の数は、この小都市では限界があった。市外、県外の助演者の支援は5年間認めようと団長(当時の市長)の弁。しかし、そう簡単に片付くものではなかった。

「ステージに知らん人ばかり」の定期演奏会も確かに続いた。市の支援、よその人の力を頂いてのよちよち歩きだ。「同好会」ではない「好きなもの集まれ」ではない難しさ。本当に金の要ることばかり、それなのにレベルの上がらぬ悩み。

そこで出雲芸術アカデミーの誕生となる。平成17年(2005年)の開校以来、みんなが学ぶ姿勢を貫くこととなり、現在、専門家も愛好家も共に講座「オーケストラ・レパトリー」の一員に、出雲フィルの演奏会は「オーケストラセミナー」となった。そうしてやっとセミナーの指導者、地元と地元出身のプレーヤー(セミナー参加者)中心の演奏となり、旗を掲げてから13年目、ようやく旗の振れる日がやってきた。成長した子どもたちは、出雲フィルにも出雲オペラのピットの中にも真剣に挑む姿となっている。音大で頑張っている修了生もあちこち、明るい遠くが見えはじめ、「良いモノづくり」には年月と集中の時間が必要だったと感じる。

なのに、先般「仕分け」の指摘の中で「出雲にオーケストラが要るのか」と迫られた。でも今、市民のためにも旗は降ろせない。子どもたちのためにも続けなければならない。これまでに要したみんなのエネルギーと計り知れない情熱は、前へ前へと向けたいのです。人づくり、街づくりの五つ星を目指す出雲のために役立ちたいと強く叫びます。

今少し、見守ってほしい。聴いてほしい。きびしく、あたたかく。

出雲芸術アカデミー理事長並びに出雲フィルハーモニー交響楽団団長 米山道雄

◆出雲フィルハーモニー交響楽団 第16回定期演奏会から <平成24年(2012)>

【わたしも「チーズ」大好き】～各作曲家の第5番を取り上げた時のプログラム～

わたしの「第五」との出会いは戦時中である。(後から思うと)もう終戦直前のめっちゃめっちゃの世事であった。戦闘帽をかむった音楽の先生が、「内緒だよ」と小さな音で月光の曲を弾いてくれた。夜間、警戒警報のサイレンがなると電灯にメガホンのような筒をはめ、外に漏れないようにした。戦況は悪化をたどり、西洋音楽はご法度であった。トロンボーンの表記も〈真鍮曲り管、抜き差し発音機〉となっていたし、洋楽のレコードもあったがもちろんお蔵入りであった。そんななか・・・家のななめ前に大きな呉服屋があり、遊びに行くと珍しいものばかりで時を忘れて過ごしたものだ。なかでも蓄音機は驚きの品であり、浪曲や東京音頭のなかに紛れていたベートーベン「第五」はダイヤモンドを探し当てたような嬉しさがあった。前記したように大音響は禁じられたので、指でつまんだ針で体感することを許されたが、毎日通った「指コンサート」は今も忘れない。子どもながらに日ごとに膨らんでゆく何かに酔いしれた。

「醍醐」は牛乳を煮詰めてチーズにする過程の「五段階」の味のことで「物事の本当の面白み」を指し、

仏教の教えにも使われるという。「第五」をテーマにしたマエストロ中井はここまで読んでいたかと感心。やはりお寺の御曹司、「醍醐味」を聴かせてくれるかな。

出雲芸術アカデミー学長 米山道雄

◆出雲フィルハーモニー交響楽団 第17回定期演奏会から <平成25年(2013)>

【「海の日」の珈琲を作ろうや」「またそげなこと」】

LPレコードが登場したのは高校生の頃。それまでのSP（昔、平円盤と称していた）と比べて音質、収録時間ともに驚異的に良くなった。出雲市立図書館では「レコードコンサート」が毎週続いていた。SPでの再生には表裏で6枚「新世界」や「第九」が普通だったので、LP1枚聴けるのは夢みただった。SP時代からのコレクターで、何でも知っておられる神様のような長沢 明氏が担当していた。（レコードは図書館の貴重な資料として現存）。忘れもしない初めてのコンサートの第1曲「シェヘラザード」。「どげかね、船に酔ったみたいだからね」「こげな名曲があーだじね」。船酔いのようにになりながら、戦後初めての童話雑誌を駅の売店で買ってもらった小学4年生の時を思い出した。今の再生紙みたいなザラ紙、もちろんモノクロ版。そこに「アラビアンナイト」の物語。心を奪われて眼を放さなかったあの時みたいな興奮。……中略……

コーヒーの焙煎が始まると、部屋は煙と匂いにむせ返って船底みたい——ここでも船酔いのようになる。これまで「カルメン珈琲」「椿姫珈琲」などのオリジナル焙煎珈琲を世に出した。今回の「海の日」の珈琲はいかがでしょう。好みは人それぞれだけど、その気になると全て楽しくなります。ヴァイオリンのソロがいつまでも続いて、忘れられないあの曲のように。

出雲芸術アカデミー学長 米山道雄

◆出雲フィルハーモニー交響楽団 第25回定期演奏会<創設25周年記念>から <令和4年(2022)>

【「出雲フィル」25周年の喜びと感謝】

出雲フィルの長い軌道を振り返ると、凄い出来事だったと驚いています。

25周年記念感謝の缶バッジを手にとって（軽いけど）ずっしりとこれまでの思い出が蘇りました。

……中略……

平成23年度の総務大臣表彰は大きな励みにもなりましたが、同時に大きな責任も感じました。

出雲で愛されるから「出雲フィル——iPhil」となるのです。

30年、50年 次のバッジが続きますよう。

この素敵な数字「25」を区切りにして学長のバトンを桑原雅次新学長に渡しました。

長い間お世話になりました。感謝申し上げます。

出雲芸術アカデミー名誉学長 米山道雄



【このたよりは、本アカデミーホームページでも掲載します <https://www.izumo-zaidan.jp/academy/>】